

電子メールの使い方

経理部情報処理課 宮本 利嗣

kei5093@kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp

はじめに

先日、「金沢大学電子メールアドレス一覧 ー第1版ー」が私の手元に回覧されてきました。これを読んでいる人のなかにも、もうご存知の方がいるかも知れないし、また全然知らない方も多分大勢いることだろうと推察されます。

これは事務局の庶務部で作成されたもので、A4版30頁をちょっと超えるような印刷物です。平成9年4月現在で合計963件のメールアドレスが掲載されており、「この「金沢大学の電子メールアドレス一覧」は、本学学内用に作成したものであり、学外者の使用を予定しておりませんので留意してください」との但し書きがしてあります。

私も事務局の一員として、この仕事に携わった者の一人として実に感慨深いものがあるのと同時に非常に複雑な思いもあります。とにかく、やっとこれで金沢大学でも公式の情報の伝達の手段の一つとして「電子メール」が認知されるための一つの関門を潜り抜けたのかなと思います。でも、まだまだ先は遠いのかなとも思います。

私がセンターの広報誌に「電子メールの使い方」という題で何か書いて下さいとの依頼を受けたときには、正直いって「エッ」と戸惑いました。どういった立場で、どういったことを書けばいいのか見当がつかなかったからです。これからの本学の方針とか方向づけについては私ごときが講釈をたれるべきではないし、技術的なことについてはこれをお読みの方々のほうがはるかに熟知されていることだからです。

というわけで、多少本題から横道に逸れる感じがあるかもしれませんが、私が今までどのようにして電子メールを使ってきたかを紹介して、私なりの感想を述べてみたいと思います。あくまで私の独断と偏見と無知に基づく個人的見解として読んでいただけると幸いです。

電子メールとの出会い

私が「電子メール」と初めて出会ったのは平成4年4月1日に「北陸先端科学技術大学院大学研究協力部研究協力課研究協力係長」という長い名前の役職についたのが切っ掛けでした。当時の「北陸先端科学技術大学院大学」（以下「JAIST」という。）は開学時でもあり私が赴任した研究協力課は、課長1人・係長1人という状況で、部屋は現在の用度係の物品倉庫で、こじんまりとした部屋の中には机が2つ、書類保管庫が2セット、応接セットが1セット、そしてマッキントッシュ（以下「マック」という。）が2セット、マイクロラインが1台、その他の事務用品はなし、というネットワークを利用して省力化・ペーパーレス化を実現するという大学の方針に沿った非常にすばらしい環境からスタートしました。（勿論、この環境は時間の経過とともに徐々に現実的なものに破壊されていきましたが）

マックは学内LANに接続されており、EGワード、エクセル、キャンパス、ユードラがインストールされていました、この4つのソフトを使ってその後の3年間いろいろな仕事をやってきました。この時のマックのディスク容量は確

か60M位いではなかったかなと記憶しています。(ちなみに現在私の使っているマシンは1.3Gあります。)

もう一つすばらしいことはJAISTでは当時の全教職員・全学生がメールアドレスを持っており、さらに教官・学生(開学時には情報科学研究科しかなかった)には1人1台のワークステーションが、事務系職員にはほぼ1人1台のマック(この「ほぼ」というのが後に使いたくない者あるいは使えない者は使わなくてもいいという風潮を生み出し、翌年度から開設の材料科学研究科の学生に1人1台のワークステーションを配布するということができなかったこととの相乗効果で大学としての電子メール等を使った事務の改善・効率化の、少なくとも私のいた3年間は大きな障害となっていたのは間違いのないところです。)が配布されているという、実に理想的な環境が整えられていたということです。勿論、メールアドレスはオープン(ペーパーレス)で、我々事務職員には電子メールで全員のアドレスが送られてきていました。私はそれをテキストファイルに落としてニックネーム等のアドレス帳を作成して使用していました。またネットワークのハードウェアに関しても、私はそっちの方面のことにはあまり興味がないので正確じゃないのですが、何でも当時の世界最高といわれるウルトラネット社のマシンを使って「FRONTIER/92」というネットワークを構築していました。

使いはじめのころ

私がはじめて電子メールというものに感動したのは、ある日ある時(残念ながら日時を覚えていません)突然、私のマックの中のユードラがああチャイムを鳴らしました。少しの間をおいて隣の課長のマックも同様にチャイムを鳴らしました。で、お互い顔を見合わせた後胸をドキドキさせながらメールを開いてみると「この電子メールは今から使えます」とのメッセージが入っていました。うれしくて早速、課長と二人でメールの送りっことを何回か繰り返したことを憶えています。その後活躍してくれた、この記念すべきメールアドレスは我ががまをいって今もJAISTに残してあります。メールアドレスの付け方は色々あるとは思いますが、やはり使う本人が愛着を持てるような、かつ、なるべく短いものの方がいろいろな意味でいいのではないかと思います。ちなみに私の妹はアメリカに住んでいますが ymiyamoto@XXXX.com たったこれだけです。

当然、使いはじめると初心者がやるようなミスは自慢じゃないけどほとんどやりました。送付先アドレスの間違い、アドレスのスペルミス、中身のないメールの送信、送信したつもりで送信しなかったとか、着信メールの中身を見ないでデリートしたとか、添付書類に馬鹿みたいに大きい画像データをくっつけたため相手のパソコンをパニックにさせてしまったとか ETC. . .。まあ一番反響が大きかったのはメーリングリスト(当時JAISTでは全教職員とか全学生とかのメーリングリストがあった)を間違えたときですね。山のように抗議が殺到しました。皆さんメーリングリストの使用には充分注意しましょう、そのため職を失った方が何人かおられるようですから。

「教官総覧」の発行

電子メールを本格的に使用してした最初の仕事は「教官総覧」の発行です。基礎となる原稿は半分位はペーパーベースでは集まっていたのですが(これは実際にJAISTに常勤というか常駐している先生方の分で、開学間もないうちに残りの先生は本籍JAIST、住所旧官署という方が結構いらしゃいました、当時は籍はあっても建物が建っていないため部屋が物理的に不足していたのです。)問題はよそにいる原稿未提出の先生方の分でした。なんせ5月の初めぐ

らいに号令がかかって6月半ばまでに発行してほしいという注文でしたので当時の私の常識から考えると無茶苦茶な注文でした。どうしたらいいのかなあと、ぼーとしているところに、情報科学研究科の佐藤助教授が教官総覧の担当はこちらですかと部屋に入ってこられて「教官総覧はTex（テフ）を使って電子出版の形でやりたいのですが」と提案されました。今では半ば常識となっている「原稿のフロッピー渡しや版下原稿渡しの校正なし」も当時は常識外れの提案であり、業者に原稿を渡しての3回校正があたりまえだと考える人との間で当然のことながら一悶着ありました。プリンターで直接打ち出した版下では文字が活字でないから美しくないという意見もあったりしました。

あれやこれやで結局やることになって、原稿未提出の方々へ提出依頼を電子メールで出したところ、びっくりしたことにほとんどの原稿（データ）がほぼ1週間くらいで電子メールを通じて集まってきました。また、ワープロ等で作成してあった原稿についてはフロッピーを提出してもらいデータ変換をかけてマックに落としました。手書きのどうしようもない原稿についてはしょうがないので業者にデータ入力を依頼して、そのデータを電子メールで各執筆者に送付して校正してもらおうという方法をとった結果、思ったより早く原稿は集まりました。

こうして、作成したデータを電子メールで佐藤助教授に送信、処理の後プリントアウトして、はい一丁上がり。ここまでは約3週間強で出来上がったので後は表紙と目次を作成して、決裁して、業者に版下を渡して校正を1回（今はどうしてるのか知りませんが当時は写真の貼り付けと頁付けは業者に依頼していたため必要だった）やって印刷・製本で何とか期限に間に合うかなという感じでした。

が、しかし思いもかけないことにこの「表紙と目次を作成して、決裁して」に意外に時間がかかってしまったのでした。ここまでの流れはいわばテクニク的な客観的な仕事であり事務方の介入の余地がなかったのですが、こと「表紙」の話になると色々物申す方々の登場となったのです。「表紙」のデザインに関する見方はかなり主観的なものでありこれを纏めるのが一仕事でした。「目次」についても色々あるみたいで同様でした。私なんかは「表紙」は「ついていけばいい」、「目次」は「掲載の頁が解ればいい」、「急いで作れとっておいてそんなことで時間を潰さないでくれよ」と思っていたわけではないのですが、いらいらしていました。さらに追い討ちをかけたのが「決裁」です。学長の「決裁」しかもそれが各部署にまたがる案件となるとあちこちから判子をもらわなければなりません。当時のJAIST事務局の幹部は学長も含めて日常的に文部省と行ったり来たりで自分の席にすることが少なく「決裁」終えるのに結構時間がかかりました。この過程で2週間強の時間が使われ結局この分が発行日の遅れとなってしまいました。

電子メールや学内LANを使った事務の簡素・合理化を真剣に考えるのならば、一部の人間が一部の合理化を考えるのではなしに、トータルのシステムとしての簡素・合理化を全員が考えなければならないのではないかなとおぼろげに感じた記憶があります。

「電子メールによる瓦板」

JAISTにはその崇高な理想の実現を目指すために開学当時は学内に掲示板というものがまったくありませんでした。さてそこで、困ったのは学外からくる各種公募関係の文書の学内各人への周知方法です。掲示板があれば当該文書を掲示して、「詳しいことは研究協力課まで」で一斉到着です。けども、ない。ないからどうしたかという、一番原始的な方法です。すべての公募のすべての書類をすべての教官にコピーして配布するという方法です。これは体力と経費は使うけれど頭は使わないですむという、私にとっての最善の方法でした。これには一時をしのげばそのうちに掲示板ぐらいできるだろうという甘い読みがありました。ところがいつまでたってもその気配がないので、よくよく考えてみると本当に掲示板を必要としていたのは、学生課と研究協力課ぐらいのものだったのです。

そのうち当然ながら教官からの紙爆弾攻撃は止めてくれという声が聞こえてきました。そこでこれは何とかしなければと思ったのが、「電子メールによる瓦板」です。これはそんなに難しいものではなく単に送られてきた公募の書類の表題・内容の要約・申込期限等の一覧表を作成しておいて新規の応募があれば更新し、その都度その一覧表を電子メールでメーリングリストを使用して全教官に通知するという方法です。

この方法にはいくつかの不安な要素がありました。ひとつは電子メールを使用していない教官から抗議がくるのではないかということ。いま一つはピーク時には公募がかなりの数になるので電子メールの文章自体がデータ量としてもかなりなもの（縦長画面のマックのユードラの画面で3、4枚分）になるので、「こんなものを毎日送りつけられたらかなわん」という苦情がくるのではないかということです。私はメーリングリストは非常に便利なものであって積極的に利用すべきだと考えていますが、やはりそこには最低限守らなければならないルールというものはあると思います。その一つには「できる限り要領よく簡潔に」ということがあると思います。画面をスクロールさせないと全部読めないメールを読むのは多少ストレスがかかります。

この件に関してはまあ幸いにも苦情はきませんでした。

ここで少し気の付く方なら、「学内の電子掲示板みたいなものはなかったの」という疑問が湧くことだろうと思います。実はありました。そこでは教官・学生が自由に意見を交換していましたし、いろいろな情報が流れていました。じゃなぜそれを使わなかったのかといいますと、使わなかったのではなく使えなかったのです。ちょっとしたボタンの掛け違いがあって、「事務局は使わない」となったのか「事務局には使わせない」となったのか定かじゃないのですが、多分「自由に意見を交換」する場に「公式情報を流す」というのが肌に合わなかったのかなという気がします（これは完全に独断ですけど）。

この件はその後、掲示板みたいなものが場所を指定して設置されたため自然消滅しました。

本学では

私は平成7年4月1日に現職に着任しました。着任して最初に受けたショックはすぐには電子メールが使えないことが解ったことでした。これは本当にショックでした。JAISTでは仕事上の連絡のほとんどを電子メールでやり取りしてきた私にとって電話をかけるということが非常に苦痛だったのです。さらに情報処理課の中にTCP/IP使って学内LANに接続されているマシンが1台もなかった（ということは、WWWも見れない）ことがさらに追い打ちをかけました。

当時の私はちょっとしたWWW中毒になっていて1日でもWWWを見ない日があると不安で何か落ち着かない感じで、世間から取り残されるような気がしていました。禁断症状からどこかに自由に使えるパソコンはないかと図書館をはじめとして学内をうろうろしましたが、なんせ本学にきてまだ日も浅いものですから皆目見当もつかない。そこで古巣の医療短期大学の看護学科の先生に頼み込んで学科事務室のパソコンを使わせてもらってようやく一息ついた、といったことがありました。まあこの禁断症状も1ヶ月ぐらいで治まりましたが。

このころから事務局内では「インターネットってなに」「電子メールってどんなもの」といった話がポツポツ出ていましたがまだまだ熱を帯びるまでには至りませんでした。

マルチメディア検討WG

この年の11月に入って事務局長の肝入りで、事務局内に「マルチメディア検討WG」が設置されました。各課代表の係長クラス11名で構成されており（私もメンバーの一人でした）何回か会議や講習会を開き、最初は勉強会的なものでしたがそのうちに検討会らしくなり2月には「マルチメディア活用による事務の改善・合理化について」という報告書をまとめました。この報告書は実務担当者の生の声が反映されており、かなり出来のいいものだと手前味噌ですが思っています。

この中で電子メールに関連するものとしては「1. 事務の改善・合理化対策」のなかの「(1) 学内LANを活用した事務合理化」のなかで「(前段省略) 特に、電子メールなど新たな業務の実施に当たっては、関連規程の改正も視野に入れ、ドラスチックな合理化対策を進めるとともに、その利用を積極的に図る(強いる) 事務体制の確立が肝要である。」とあります。どうです、過激でしょう。

さらに「2. マルチメディア時代に対応した環境整備」のなかの「(1) 機器の整備充実」のなかで「○パソコンを本部学長室、事務局長室、秘書室、各課及び各部局に少なくとも各1台を配置することとし、平成8年度中に整備することとしたい。とりわけ、事務局長室、秘書室及び本部各部には、平成7年度内(3月中旬)に各1台を配置することとしたい。(既に、庶務課に2台整備済み) ○導入機種については共通メーカーでまとめ、アプリケーションについても同じものを使用することが肝要と思われる。○各部局への機器導入に係る整備予算については、全学一斉に整備する必要性から、部局長懇談会で協議して全学的視点から措置することが望ましい。」とあります。現在これらはすべて実行されています。

この報告書には他のマルチメディアを使用したいろいろな斬新的(過激)な提案がなされています。それらのすべてが現在実行されていればかなりの改善・合理化が行われていたはずですが、残念ながらそうはなっていません。理由は簡単です。「お金がない、人がいない、過激すぎる」です。それでも、ひとつひとつ、遅い速いは別にして実施しています。

マルチメディア情報検討ワーキンググループ

平成8年度に入って「マルチメディア活用による事務の改善・合理化について」の報告書を受けて、さらに具体的に実行可能な提案を行うために「マルチメディア情報検討ワーキンググループ」が設置されました。各課代表の課長・補佐・係長・主任クラス13名で構成されており（私もメンバーの一人でした）何回か会議を開き、1月には「事務の情報化について」という報告書をまとめました。

この中で電子メールに関連するものとしては「1. Eメール等の活用により事務の情報化・合理化を図る」のなかで「Eメール:各種会議開催通知、事務連絡」、「2. 実施の時期」のなかで「実施の可能なものから、順次積極的に実施していく」、「3. Eメール推進方策」のなかから抜粋すると「・ハードの整備(一人1台を目指して)・ワープロ更新の際は、原則としてパソコンに更新する・Eメールアドレスの取得・Eメールを使っていくことの決定・周知・初心者向けの研修を実施・各課、事務室にリーダーを配置」と実行可能な具体的に提案がなされています。

本学における事務の情報化

現在、事務局ではこれらの提案を受けて、ゆっくりではありますが確実に事務の情報化・合理化を進めています。いろいろな具体的な実行可能な提案が出され、そのうちのいくつかは実施されています。多少歩みの鈍いのが気になりますが。

本学の事務の情報化・合理化については、一定のレベルまでは事務局主導で可能だとは思われますが、それ以上となると全学の教職員の皆様の理解と協力（発想の転換と既得権の見直し）が不可欠です。いろいろご意見はあるとは思いますがよろしくお願いします。

最後に

J A I S T での私の電子メールの使用例を二つほど紹介させていただき、問題点等を述べさせていただきましたが、念のため申し上げておきますと、これは決して J A I S T に対する批評めいたものでは決してありません。最新の設備を使わせてもらい、すばらしい先生方にネットワークに関することを教えていただき非常に感謝しております。ここで紹介したようなことはいずれ本学においても似たような問題となるだろうと感じられたから敢えて紹介させていただきました。

これは5年ほど前の話なので現在では大幅に状況が変わってきています。マシンのスピードは上がり、ディスク容量はメガからギガへ、通信回線の速度はKBからMBの世界へ、ネットワーク接続マシン数はおそらく10～20倍以上になっているでしょう。

高価でしかも専門家しか扱えなかったサーバー機も今では手軽に自分のパソコンをサーバーとして扱えるようになった今、私たちは何をすればいいのでしょうか。検討を加え議論のための議論をしているうちに、時代はインターネットからイントラネットそして個人サーバーを結ぶなんとかネットへとどんどん進んでいきます。これを黙って指を咥えて見ただけではあまりにも寂しいと思いませんか。

確かに、「文化と伝統を守り続けていく」姿勢も必要かもしれませんが、「創造の中に文化と伝統を生かしていく」姿勢のほうがおもしろいと思いませんか。

「新しい情報文化発祥の地金沢大学では今日も世界中から訪れた大勢の研究者達によって最先端の研究活動が行われています」なんて夢をみてみたいのは私一人なんですか。